

今月は、人権啓発映画の一場面から人権を考えてみます。

ある公園で、乳幼児と若い父親がベンチに座ってくつろいでいました。そこへ、高齢の女性がやってきて、親子に話しかけました。

女性：お母さんは、どうしたの？

父親：仕事に行っているの、ぼくと遊んでいるんです

女性：あら、大変ねえ。お母さんがいなくてかわいそうねえ

父親：どうしてかわいそうなんですか

女性：だって、子どもはお母さんに育ててもらったのが幸せよ

父親：（気分を害して立ち去る）女性：どうして怒ったのかしら？

何か悪いこと言ったかしら 私たちは、誰かと接するとき、

これまでの経験や周囲の環境などから身につけたものの見方によっ

て行動することがあります。これが、無意識の思い込みや偏見となり、何気なくかけた言葉が相手に不快感を与えるのです。このような無意識の偏った見方を「アンコンシャス・バイアス」といい、誰にでもあるものです。アンコンシャス・バイアスそのものは問題ではなく、無意識のため本人に自覚がなく、気づきにくいことが問題です。上記の事例のように気づかずにいると、そこから生まれた言動が知らず知らずのうちに相手を不快にしてしまうのです。

アンコンシャス・バイアスから生まれる言動には「こうあるべき」といった決めつけや押しつけのほか、自分の考えや願いに沿った情報ばかりに目が行き、そうでない情報は軽視してしまうことも挙げられます。

誰もが大事にされ暮らしやすい社会は、まずは個々人の中にある思い

込みに気づくことから始まるのではないだろうか。大切なことは、一人ひとりが相手の立場を考え行動することです。

